様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５２０６６

研究課題名（和文）ロシア語文化圏の東西周縁の文学における戦争の語りの比較研究

研究課題名（英文）Comparative Study on War Narratives in Belarus, Ukraine, and Sakhalin

研究代表者
越野　剛（KOSHINO, Go）

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授

研究者番号：９０５１３２４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：ベラルーシやロシア極東における戦争や異文化交流の記憶を比較対照を念頭におきながら研究した。小さな地方の文学に焦点を合わせることで、国民文学の枠組みにおさまらない地方の文化的アイデンティティの多様性を明らかにすることができた。具体的には戦争における民間人の虐殺、外国人のイメージ、多言語による創作といった観点を取り上げた。

研究成果の概要（英文）：Our research project conducted a comparative study on the memories of wars and cross-cultural encounters in Belarus and the Russian Far East. In particular, we clarified deep diversities of cultural identities in local regions that extend beyond the framework of “national literature,” focusing on inconspicuous "local" literature. Specifically we chose topics such as the massacre of local civilians in war, image of foreigners, and literary creation in multiple languages.

研究分野：ロシア・ベラルーシ文学

キーワード：戦争の記憶　ロシア　ベラルーシ　極東　地方文学

１．研究開始当初の背景

（１）地方文学研究

●社会主義体制の終焉によってアクセス可能になった広大な旧ソ連の空間で地域研究が急速に進展した結果、現在では調査対象になっていない地域はほとんど残っていない状況になっている。複数の地域を比較・総合するような研究が求められ、例えば歴史研究ではテリー・マーチン（『アファーマティブ・アクションの帝国』、2001 年）や塩川伸明（『多民族国家ソ連の興亡』、2004-2007 年）などの優れたモノグラフィが書かれている。しかし文学研究においては依然としてモスクワやペテルブルグに視点が偏っている。沼野充義が精力的に研究・紹介した非ロシア系のロシア語作家にしても、その多くは中央の文壇で注目を集めた人々である。ソ連時代にローカルな作家組織や文芸雑誌が整備された結果、地方の文学活動は今に至るまで盛んであるが、**複数の地方文学を比較する**ような試みはなされていない。

（２）戦争の記憶研究

●ソ連・ロシアにおいて**戦争文学**は盛んに書かれたが、プロパガンダ的要素の強い特殊なジャンルのため先行研究は非常に少ない。最近の社会主義リアリズム研究でも部分的に言及される程度である。近年では映画（D.Youngblood, Russian War Films, 2010）やポスター（S. Norris, War of images, 2006）において戦争の表象は着目されてきているが、ソ連時代に書かれた膨大な戦争文学のテキストは、特にそれが地方の出版物の場合は手つかずのままであると言ってよい。

●申請者は欧米でもほとんど研究されてこなかった旧ソ連の西端ベラルーシ（白ロシア）の文学について調査した経験があり、また近年では極東サハリンの文学者における地域アイデンティティについて研究を行い（原輝之編著『日露戦争とサハリン島』2011 年所収論文）、それぞれ成果をあげている。したがって両地域における文学テキストを題材にして**ローカルな戦争の記憶**を比較する能力は十分に有している。ベラルーシとサハリンは旧ソ連の両端に位置しており、一方はドイツやポーランド、他方は日本や中国との間で幾度となく境界線が引き直されるという類似した歴史を持ち、また移民や戦争を通じて地域間の人的交流が古くから行われていた。その点で比較研究の対象として適している。

２．研究の目的

本研究ではロシア語文化圏の東西の周縁地域における戦争文学のテキストを比較することにより、中央（モスクワ・ペテルブルグ）の文学で確立された「戦争神話」の規範から外れるローカルな戦争の記憶の特徴を明らかにすることを目的とする。ベラルーシとウクライナは独立国でありながらロシアの強い文化的影響下にあるため、ロシア語文化圏の西の周縁地域として位置付け、また極東サハリン地域を東の周縁とする。

（１）異なる**複数の地域を一人の研究者が調査する**ことにより、比較の基準を一貫性のあるものに保ち、信頼性のある結果を得ることができる。よくある複数の地域の研究者を並べただけの「比較研究」とは質のちがう研究が可能になる。

（２）地方の戦争文学を研究することで周縁から外部を見るという視座は得られるが、外部から周縁への眼差しは、外部の言語文化に通じた研究者でなければ難しい。ヨーロッパ、中国、日本の戦争文学の研究者とネットワークを構築し、周縁地域を軸にしながら**東アジアと西欧を結ぶユーラシア規模の共同研究プロジェクト**に発展させる。その際に複数の外部の専門家に対して、あくまで一人の研究者が統一性のある基準をもって比較を行う。萌芽研究の 2 年目には個人のプロジェクトに欠けている視点を補う共同研究を組織するため、基盤研究ＡもしくはＢを申請する。

３．研究の方法

（１）境界地域を研究するということはそれ自体が内部（味方）と外部（敵）を比較するという行為であり、複数の周縁を研究するということは、**比較を比較する立体的な作業**だと言える。例えばソ連における第二次世界大戦は極めて強固な愛国的文脈に結びつけられているが、ベラルーシの作家ヴァシリ・ヤカベンカは善良なナチスの占領軍司令官を描き、サハリンのアレクサンドル・モレフは日本占領時代の記憶を戯画化し、それぞれ規範的な語りから逸脱している。

（２）複数の周縁を比較することにより、周縁と中心の関係だけでなく、**周縁から周縁へという新しい視点**を得ることができる。例えばウクライナ・ベラルーシから極東・サハリンへの移民の歴史は古く、言語文化面での影響は強く残っている。また独ソ戦争では極東から西部戦線へ、対日本戦では西部から極東へという軍隊の動員による人の移動があった。ロシア正教古儀式派やコサックという両周縁地域に共通する社会集団の存在も興味深い。これらは周縁から周縁への**伝播による共通性**として考えられる。

（３）西の周縁にはベラルーシ語・ウクライナ語、東の周縁はニブフ語・ウィルタ語といった地元の言語文化が存在する。どちらの地域もロシア語の強い影響下にあると同時に、西ではドイツ・ポーランド、東では日本・中国の文化と交差することで独自のアイデンティティを生み出した。西のユダヤ人、東の朝鮮人という領域横断的な社会集団も共通する。複数の周縁における**類型による共通性**

を見出すことで、地域のアイデンティティを類型化するモデルを提示できる。

（４）極東における日露戦争の記憶は、中央の作家ヴァレンチン・ピクリと、サハリンの作家オレグ・クズネツォフでは大きく異なる。ソ連の代表的な戦争作家ヴァシリイ・ブイコフが描く独ソ戦争は、同じ作家がベラルーシ語のヴァシリ・ブイカウとして現われた時、ローカルな読者によって異なる読まれ方をされる。中央のスタンダードな戦争神話とは別の位相にある**ローカルな戦争の記憶やナラティブ**を明らかにする。

（５）東西の辺境地域は複数の異なる地域からの移住によって形成されてきたため、複雑な多文化社会を構成している。極東やサハリンは監獄・流刑地としての歴史があり、これも一種の「移民」と見なすことができる。同じことは地域からの動員によって形成される軍隊の構成についても言うことできる。移民（流刑）と軍隊が**複数の地方をつなぐネットワーク**を形成し、**「移動する周縁」**となっていることを、ローカルな戦争文学・歴史文学のテキストを通して明らかにする

４．研究成果

（１）ベラルーシおよび極東地域において以下のような現地調査を実施した。

●2012 年 8 月 25 日～9 月 1 日にポーランドおよびベラルーシ西部の現地調査を実施、主にカトリック教会やポーランド人が地域において果たした役割やその記憶を調査した。2014 年 3 月 19～25 日にミンスクにおいて現地調査を実施、作家や研究者に聞き取りを行って現代ベラルーシ文学における地方のアイデンティティについて調査した。2013 年 9 月前半にミンスク・モスクワで現地調査を実施、ベラルーシにおける民間人の虐殺の記憶について調査し、モスクワでは現地の作家や研究者を集めて研究会を組織した。

●2014 年 3 月 5～8 日に大連・旅順の現地調査を実施、日露戦争の戦跡や第二次世界大戦におけるソ連軍戦没者墓地を調査した。2014 年 8 月末から 9 月初頭にかけてロシア極東と中国東北地方で調査旅行を実施、戦争と中露の異文化交流の記憶について調査した。2015 年 3 月 4～8 日に台湾で調査旅行を実施、主に金門島における戦争と戦時体制の記憶について調査した。

（２）以下のようなかたちで戦争の記憶に関して複数の地域を比較する共同研究を組織することができた。

●2012 年 7 月 15～16 日に北海道大学で複数の地域の研究者を集めて、研究会「近現代戦の表象比較研究：戦争のメモリー・スケープ」を開催した。2013 年 2 月 5～7 日北海道大学大学院共通授業科目の集中講義「ユーラシアにおける戦争の記憶と表象」においても中国やベトナムの研究者の協力を得た。これらの共同研究や共同企画によって得られたネットワークをもとにして、旧ソ連、中国、ベトナムの戦争の記憶を比較する研究テーマにより科学研究費基盤Ｂに申請して採択された。2014 年 3 月に刊行された『地域研究』14-2 号では、特集「紅い戦争の記憶：旧ソ連・中国・ベトナムを比較する」を企画した。

（３）以下のように研究会やシンポジウムにおける報告パネルを組織し、また研究成果の口頭発表を行った。

●2013 年 9 月 8 日大阪経済法科大学で開催のスラブ・ユーラシア研究東アジア学会で戦争における犠牲者の表象についてパネルを組織した。同年 12 月 11 日の北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター国際シンポジウムではロシア、モンゴル、日本における第二次世界大戦の記憶を比較するパネルを企画した。このとき招へいした研究者セルゲイ・ウシャーキン氏による中央アジアの映画と記憶に関する講演会を東京大学において実施した。同年 12 月 21 日のソウル国立大学ロシア東欧ユーラシア研究所での国際シンポジウムでベラルーシにおける民間人虐殺の記憶について口頭発表を行った。2014 年 9 月 28 日、立教大学で東欧文学に関する国際シンポジウムを組織し、ベラルーシの作家グリゴリイ・レレスについて口頭発表を行った。このとき招へいした研究者エレーナ・ガポヴァ氏によるベラルーシにおける言語状況についての講演会を筑波大学で実施した。同年 12 月 6 日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの国際シンポジウムで作家レレスについて口頭発表を行った。

（４）現地調査や研究会などの実施を通じて以下のようなテーマで研究を行い、成果の一部を公刊した。

●【中国のイメージ】ウラジミル・ソローキン、ヴィクトル・ペレーヴィン、ホリム・ヴァンザイチクなどの現代ロシア作家の近未来小説を題材にして、そこに現れる中国のイメージを帝国、ジェンダー、黄禍論といった観点から分析した。雑誌論文②④

●【民間人の虐殺】ナチスドイツのベラルーシ占領下で起きた住民の虐殺事件の記憶をメモリアル施設の建設とベラルーシ作家アレシ・アダモヴィチやスヴェトラーナ・アレクシエヴィチの文学作品を比較しながら、公的な記憶の形成とそこに収束されない記憶の要素を明らかにした。雑誌論文①③

●【多言語の創作】イディッシュ語とロシア語で創作したユダヤ系ベラルーシ作家のグリゴリイ（ヒルシュ）・レレスに焦点をあてながら、ベラルーシや他の東欧文学における言語と民族のアイデンティティの複数性・不確定について分析して、複数の「国民文学」がひとりの作家を共有する可能性について考察した。学会発表③④⑤

●【異文化の記憶】ウラジオストック、ブラゴヴェシシェンスクにおける旧中華街や中国との交流の記憶、大連、旅順、黒河、ハルビンにおける「ロシア風情街」とロシアとの交流の記憶について現地調査を行った。またウラジオストックの作家アレクサンドル・トコヴェンコ、イリーナ・ムトフチイスカヤなど地方文学に関する資料を収集した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
①越野剛「ハティン虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶」『地域研究』Vol.14-2、2014 年、75-91 頁（査読有）。
②越野剛「幻想と鏡像―現代ロシア文学における中国のイメージ」望月哲男編著『ユーラシア地域大国の文化表象』ミネルヴァ書房、2014 年、154-173 頁（査読無）。
③越野剛「スヴェトラーナ・アレクシエヴィチ―「ユートピアの声」を集めて」『ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち』青土社、2014 年、30-37 頁（査読無）。
④Go Koshino, "Illusion and Mirror: Image of China in Contemporary Russian Literature," in Shinichiro Tabata, ed., *Eurasia's Regional Powers Compared: China, India, Russia* (Routledge, 2014), pp.205-221.（査読無）

〔学会発表〕（計１０件）
①Go Koshino, Belarusian Literature Written in Russian: a Case of Belarusian Jewish Writer Grigory Reles, SRC/IREEES Joint Conference “Where Did Ukraine Come from? Where is Ukraine Heading for?”、2014 年 12 月 6 日、北海道大学（北海道札幌市）
②越野剛「ベラルーシ、存在しなかった国の文学史」、スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会、2014 年 10 月 8 日、北海道大学（北海道札幌市）
③Go Koshino, Belarusian Literature Written in Russian: the Case of Belarusian Jewish Writer Grigory Reles, International Symposium "Images of East European Literature: The Variable and Invariable in the Past and Present"、2014 年 9 月 28 日、立教大学（東京都豊島区）
④ Го Косино, Мемориализация как модернизация: Алесь Адамович и Вторая мировая война в белорусской литературе, The 6th Symposium organized by IREEES, Seoul National University and SRC, Hokkaido University “Modern as the Past: Russian Modernism Viewed from the 21st Century” 、2013 年 12 月 21 日、ソウル国立大学（韓国・ソウル）
⑤Go Koshino, “Cultural Representation of the Khatyn Massacre in Belarus,” East Asian Conference of Slavic Studies、 2013 年 8 月 9 日、大阪経済法科大学（大阪府八尾市）

〔図書〕（計２件）
①越野剛・宮風耕治・久野康彦・岩本和久『ロシア SF の歴史と展望』スラブ・ユーラシア研究センター、2015 年、全 127 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
越野　剛（KOSHINO, Go）
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・准教授
研究者番号：90513242